モーリャックの回心をめぐって

柏　原　紀久子

1

モーリャックは，パスカルについて「純粋に知的な回心と全く神秘的な回心があるというのは，バラエティを好む伝記作家の趣味から生まれた伝記にすぎない。本当を云えばパスカルが回心したのはたゞ一度だけ。あのルーアンの時だけである。」[1] といっている。モーリャックにとっては自分の罪を自分の中に感じる時が信仰のはじまり，即ち回心なのである。

Un homme qui se croit pécheur, qui se sent pécheur est déjà aux portes du royaume de Dieu. C'est cela qui fait la différence entre les époques de foi et les autres.[2]

というのは，「恩寵がある人の中に入りこむときには，その人は自分を見る明晰な視線になるものだ。我々が何であるかはっきり分りはじめたときには，救いはすぐそこまできている。自己が神聖になればなるほど自己への嫌悪が増加する。」[3] これは神学的には「授けられた最初の恩寵は，心眼のあきらかとなる恩寵。」[4] と説明されているところであろう。従って，この意味では，終生，罪を信じ続けたモーリャックには，中途における回心とよばれるものはない。

しかし，彼が終始，人間の原罪を信じ神を信仰し続けたことは確かであるが，彼が「キリスト者の苦しみ」を著わすに至るまでの間において，彼が人間の「本性」に強く魅かれ執着し，真実である「神」と，しかしながらどうしても否定することができなくて魅かれてやまない人間「本性」との間にあって，その矛盾に苦しんだことは明らかであり，

Je ne reniais pas la vérité, mais je reniais qu'elle fût accessible.

という様に，彼自身も，真実である「神」を受け入れ難かったことを告白している。これは，彼が神を認識してはいるが「本性」を克服することがができず従って「罪」から救わていない状態であるといえる。彼は第一の回心以後のパスカルについて，

Sa raison adhérait à Dieu, et dans la mesure où le coeur est ce qui, en nous, conçoit les premiers principes, il croyait aussi par le coeur, mais il ne croyait pas encore 《par le sentiment du coeur.》 Il n'aimait pas, 《Qu'il y a loin de la connaissance de Dieu à l'aimer!》[6]

と記しているが当時のモーリャックの信仰も又,これと同じく神の認識の状態にとゞまり,心の感情によって愛していなかったと思われる。何故なら

> Cela ne lui sert de rien que le surnaturel se manifeste à ses yeux, car ce n'est pas cette connaissance qui nous change, mais l'amour. 《Qu'il y a loin de connaître Dieu à l'aimer.》 dit Pascal.[7]

という様に自分の罪を克服し,真の救いの状態に達するためには,神を愛さなければいけないのである。従って明らかにモーリャックは,この神を認識するだけの状態にとゞまっていたのである。

しかし,その後「キリスト者の喜び」以後においては,「本性」と「恩寵」の対立はなくなり「恩寵」の中に生きる喜びが示されている。ここにおいて彼の信仰が「神の認識」から「神を愛する」に至ったことが明らかである。彼の信仰上の変化は,「恩寵の中の恩寵に入った」とか,「カソリック内部での内部回宗」という言葉で指摘されているところであるが,しかし正確には,彼のこの変化は,彼自らパスカルの言葉として引用している「神を認識する」ことから「神を愛する」に至ったことと定義するのが最も適当であると思う。そしてこの変化こそ真の回心とよばれるべきであり,従ってこの意味でモーリャックは回心を経験しているのである。

この,「神を認識する」ことから「神を愛する」に至るのに,どの様な道を通っていったのであろうか。その彼の後をたどってみたいと思う。

2

彼の神認識は,非常にジャンセニスム的色彩のつよい宗教教育を通してであったが,これが彼に神の認識を与えると同時に,「神を愛する」に至るまでの道のりを遠くしたそもそもの誤れる出発点となったと云えると思う。

ジャンセニスムにおいては,神はおそろしいものに思え,祈りの文句は罪と死に関するものばかりであり,天国の栄光はたゞ選ばれた者だけに与えられる。彼はこのおそろしい神,死,罪のおそれの中で絶望的な悲惨な人間の条件の認識にめざめさせられたのである。「私はこの時,魂の不滅は,わずかな人々だけのものであり,選ばれていない人々の地獄,それは虚無 le néant という確信を抱いた。他の人々は死んでしまうだろう。これは突然の直感によってそう感じたのだ。」[8] このようにジャンセニスムによって神を知ったことは,自分が投げだされている宇宙の空間を,地獄としての恐怖でもって認識したことになる。そして彼が愛読したという『パンセ』からも「この無限の空間の永遠の沈黙は私を恐怖させる。」(断章ラ. 201) というパスカル的恐怖を意識させられ,一層恐怖感をつのらせたにちがいないと思われる。そして

> J'avais été élevé dans cette croyance que le péché mortel vous coupait de

Dieu absolument.[9]

という様に，虚無は，人間の死に至る罪の証拠であり，彼にとっての神は，罪の告発者としての厳しい神であったのである。「彼の目は十字架につけられた神から一度も離れなかった。だがこの神は，余りにも人間をぞっとさせ人間の罪の残酷さを告発している神である。旧約の時代に代々のラビ達がいかにイザヤ書の章句をとなえてもそこからいささかの希望の光をも受けなかった神である。」[10] と第一回の回心から第二の回心に至るまでのパスカルのみつめた神を説明しているが，モーリャック自身がみつめたのもこの神であったと思われる。そして，この，罪を告発する厳しい神の概念は，同時に，「人間本性」の全き否定を意味するのである。「おそろしいクリスチャン的要求が私にとって明らかとなった。神は肉体に関係がなく，「本性」と「恩寵」は二つの敵同志の世界だ。パスカルはそのことを過度に不当な厳しさで教えてくれた。」[11] ここに彼の「本性」と「恩寵」の対立が生じる。この憎むべき罪ある「本性」の全くの否定を要求する「恩寵」と，どうしても否定することができない「本性」との矛盾が生まれる。

それでは，モーリャックがどうしても執着し，否定できない「本性」とは，どの様な意味においてのものなのであろうか。彼は感受性豊かな心情の持主であり，心情において人を愛することを求めている。「単なる corps だけならあきらめることはできる。しかし，愛する者をどうして愛さないでいられよう。欲望したり愛したりするのに別々の魂をもっているわけではない。愛する者を抱きしめたいと願うのも同じ魂である。二つのものを使いわけることができない。」[12] ここにおいてみられるのは，肉体存在たる人間が愛を持つときには，肉体を通さざるを得ないのであり，諸々の官能的本能も伴なうが，しかしその愛は単なる passion de la chair ではなく，それは passion du coeur であり，愛は人間がその心で求めてやまないものであるという，「人間の愛」の，心からの肯定である。又，「愛することによって自己がより純粋になる。」[13] のであって，人間の愛は，聖性さえ伴なうものである。しかも人間はこの愛を「本性」の内側から，存在の奥深いところから湧き上るのを感じるのである。自己の犯した罪の中に自分ではどうにもできぬ人類の罪を宿命的に感じ，その原罪の意識に射すくめられながらも，テレーズは，眠れる幼子を見て，自己の奥底から湧き上がる感動をおぼえる。

> Elle s'agenouille, touche à peine de ses lèvres une petite main, elle s'étonne de ce qui sourd du plus profond de son être, monte à ses yeux, brûle ses joues: quelques pauvres larmes, elle qui ne pleure jamais![14]

この様に，モーリャックは，自己の内から，いわば実存的な愛の欲求につき上げられる。それは，「血と肉」を盛った生きた人間にむかって限りなくほとばしる。肉体を抱きしめることによって，又，心を通じ合わせることによって，又，幼子の手に触れることによって，人間は湧き上る感動をおぼえる。彼が肉と霊の二元論に反発するのは，暖かい肉体に触れることによっても，心に愛が触発されることが可能だからである。この様に，彼は，「血と

肉」を盛った人間存在に限りなく魅かれるのである。

Rien ne l'intéressait que ce qui vit, que les êtres de sang et de chair. Ce n'est pas la ville de pierres que je chéris ni les conférences ni les musées, c'est la forêt vivante qui s'y agite, et que creusent des passions plus forcenées qu'aucune tempête. Le gémissement des pins d'Argelouse, la nuit, n'était émouvant que parce qu'on l'eût dit humain.[15]

この「肉体存在」たる人間にむかう愛の欲求が，神が有罪なりとして告発する「本性」からほとばしる故に，彼は，罪ある「本性」ではあるが愛も又真なりといって，「本性」を完全に裁くことができないのである。「一日として愛することをやめたことのない僕が，どうしてこの心をおさえられようか。聖人達のまねをしようとしてもできない。彼らの自己放棄には不合理なものがある。」[16] と抵抗している。即ち，親をも棄てて我に従え，という全く人間性を否定する神の言葉に，激しく抵抗するのである。そして Bonheur を手に入れるためにあらゆる tendresse を自分に禁じたパスカルに対しても，その払った犠牲が余りにも大きいとして断絶感をもち，彼，モーリャック自らは，人間の愛をえらぶ。この様にモーリャックがどうしても否定することができないと神に抵抗し主張している「本性」とは，愛さざるを得ない心情をもつ「本性」であることが分る。真実の Bonheur を約束する神の愛は認識することはできるが，しかし，この愛する心を持つ「本性」も又真実であることを主張しているのである。ところでパスカル的にいえば，人間における心情は，「本性」に属しながら「超自然」に対して開かれ，人間に超越の可能性を与える唯一の ordre である故，この人を愛する心情が，結局神を愛する心情でもある筈なのであるが，モーリャックは，神だけを愛せよという厳しい言葉にこだわり，「人間を愛する心」と，「神を愛する心」を全く断絶したものと考えてしまっている。即ち，人間は自分が人を愛してこそ，神の愛も又知ることができるのであるが，当時のモーリャックは人間の愛を神が否定しているものと一方的に考えたため，「神の愛」は，人間の愛と別の次元のものとなり全く絶望された状態にあったのである。彼が，神の愛は人間の愛と同じ愛であることに気づいたとき，即ち愛はみな同じ愛であることに気付いたときこそ，彼は，彼の「人を愛する心」を通して「人間を愛しているという神の愛」を理解することができ，「愛なる神」が認識されるのである。彼が「人間の愛」と「神の愛」を別のものとして考えている限り，「愛なる神」を理解し受け入れることはできない。従って，彼のこの誤解は，彼が「本性」を罪として認識した結果、神が人間の愛も含めて人間性のすべてを否定していると考えたために生じたのであるから，この彼の誤解が解けるためには，決して神は，「人間の愛」を否定していないこと，即ち，人間の「本性」には罪ばかりでなく愛も又真実にあることが立証されねばならない。

ところで，「キリスト者の喜び」以後においては，彼は，神を愛するに至っている。人間の愛を否定する神の厳しい要求は，「キリストのこの人の性にさからう前代未聞の要求

は，永遠の救いの到達点ではなく，出発点」[17] なのであり，「神が自分だけを愛されることを望んでいるなどというのは馬鹿げている。彼が主張するのはすべての愛が彼の愛の中に含まれることなのである。」[18] という様に，人間の愛と神の愛の矛盾が全くなくなってしまっている。これは，モーリャックが「我は論理家である神ではない。汝のいっさいの哲学ほど我から遠いものはない。我が心は汝の理性にてはとらえられない理由をもっている。我はl' Amour であるから。」[19] という愛なる神を彼の心において受け入れたことを示している。以前においてみたような人間の罪を告発する厳しい神でなく，人間を愛し許さんとする愛なる神を見出したからこそ，あの厳しい要求も「キリストにあっては，それらは愛に対立するものではなく，愛のしるしである。」[20] という様に解釈するに至るのである。

では一体，どの様にして「愛なる神」を認識することができたのであろうか。どの様にして「人間の愛と神の愛」の対立が解消され，「厳しい，人間性に反する神」から「愛なる神」に至ったのであろうか。即ち，人間の本性には，罪だけでなく，彼が主張した様に，愛も又実在することを，モーリャックはどの様な証拠で確認し，その自己の愛を通して，「愛なる神」を理解し得たのであろうか。

パスカルは，神を愛するのに，まず理性を用いて理性に語りかけ，そして理性だけでは神に達することは不可能であるから，ロボットの様に愚かになって理性をかなぐりすて，〈卑下によって天啓に身を捧げること〉を提案している。そして，自らは，ささいな tendresse まで警戒し，ひたすら心情を開いて，祈り，神の恩寵を待ち望んだのであるが，モーリャックは，先に見た様に，パスカルの様に自分のすべてを捧げることはできなかった。自己の中の人間に対する愛を律することができず，その矛盾に苦しんでいた。

しかし，彼が，人間の罪を告発し，その罪を悔いて絶対である神の愛に参加する様よびかける十字架のキリストを前にして，人間に対して抱く愛を否定して神の愛を受け入れることの矛盾に苦しんでいる時，彼は，その仰ぎ見る十字架の中に，人間イエスの姿を見出したのである。自分の命を犠牲にしたイエス。彼は，そこに，至上の愛をもつ人間としてのイエスの姿を見出したのである。十字架は，決して人間の残酷さ，罪のみを示しているのではなく，命を犠牲にするほどの至上の愛をもち得る人間の本性をも示していることに，モーリャックは気がついたのである。

「同じ人間の中における残酷さと，愛。一度それを見たものは，永久にそれが分る。」[21]

この様に，十字架の人間イエスが，人間の本性には残酷さと愛とがあることをモーリャックに立証したのである。

そして，ここに，「人間の愛」と「神の愛」の矛盾が解決された。何故ならこの「本性」において至上の愛をもち得る人間に，神は人間がその「本性」における愛を通して神の愛を理解できるべく，自己の命を犠牲にするという肉の形で神の愛を示されたのだとモーリャックは直ちに直感したのである。

Dieu est amour. Il n'y a pas de plus grand amour que de donner sa vie.

La croix se dresse au point de rencontre de ces deux paroles.[22]

十字架は，人間の愛と，神の愛の出会いなのである。

この様に，モーリャックは，彼が信じてやまなかった人間のこの愛は，やはり「本性」にあるものであり，しかもそれは神の愛を理解するためのものであり，人間は，自分の愛する心を通して神の愛を理解することができるのであるということを悟った。即ち，決して人を愛する心と，神を愛する心は別のものではなく，人を愛することは神を愛することでもあることをモーリャックは理解した。

La tendresse humaine, c'est le même coeur qui aime Dieu et qui aime les créatures.[23]

人を愛する心は，神を愛する心でもあり，もし人を愛でもって愛することができたなら神をも同じ様に愛することができるであろうと次の様に云っている。即ち，超自然を知って恐怖するドン・ジョヴァンニは，その神の認識と恐怖だけでは彼の救いには何の役にも立たなかったのであって

S'il avait aimé d'amour ses victimes, il aurait pu tout à coup aimer Dieu comme il avait aimé ses maîtresses.[24]

この様にモーリャックの回心とは，彼がその心において抱き続けた人間の愛を，十字架のイエスによって，それが，真実のものであることを確認したことであるともいえる。従って，彼は回心後ははっきり，人間の愛を強調讃美するようになるのである。この様に回心後において，彼が人間の愛を，神との関係においてでなく，人間の本性そのものにあるものとして強調讃美し，肯定していることは，彼が，十字架において人間イエスの愛を見て，人間の「本性」の中に愛を確認し得た彼の喜びを証明するものである。

彼が回心のあとで著わした「Le Mystère Frontenac」は，人間は生まれ死んでも川の水が永遠に流れるように人間の愛も又永遠に続いていくという家族愛の讃歌であり，又，彼は，次の様に人間の愛は，もし神が存在しなければそれが至上のものであると断言して，人間の愛にある bonheur を肯定している。

「哀れな人間の幸福が存在するという現実。もしも神との結合がおとりであるなら，もしも永遠の契約が世界において響きわたらなかったら，この哀れむべき愛こそ，はかりしれぬ価値をもつ真珠だろう。それを越える貴いものは何もなくこれを手に入れるためには，すべてを断念すべきであろう。しかし『言葉』は肉となった」[25]

この様に，人間の愛の結合に幸せがあることを強調すると同時に，又，この愛の欲求が本能的に人間の内にあることも更に確認，強調している。

「彼女におけるこの欲求，子供なら多分それをなだめたであろう。それは必然的にそうなのだ。彼女はそれに思いつかなかったとは！　彼女は息づまらせるこの欲求に名を与えることができて満足である。押し殺された母性の本能なのだ」[26]

そしてモーリャックは，どんな肉体的な愛の中にもこの愛の本能が働いていると考え，

どんなに肉体の中におぼれた愛でも，結局それは肉体と何の関係もなく純然たる愛であり，従って，それ故どんな愛でも愛する人間は決して罰せられないと次の様にいっている。

Crois-tu que c'est sur ce pauvre amour humain que nous sommes jugés et condamnés? Ces passions du coeur, qui sont à la lettre des passions au sens du martyre... Charnelles, certes, et où la chair a finalement si peu de part, et même aucune.[27]

そして，人間は自己の内にこの無限の愛をもつかぎりたとえ，キリストを憎んでいようと最後には，この至上の愛たるキリストの愛を見ることになる。「深淵の中にすべりこんでゆきながら彼女は結局この愛を，あらゆる名の上にあるその名によって認識し，見，呼んだのである。」[28]パスカルについての解釈の変化も，この「人間が愛することができる故に，キリストの愛を知ることができる」というモーリャックの確信を証明している。即ち，「パスカルがどんなささいな愛情をも憎んだのは，ジャンセニスト一流の警戒心からであり，その様に彼はジャンセニスム故に本性に対して無理をして険しい小道を通って崖によじのぼったが，岩上では無数の人が十字架を囲んで事の成就されるのを待っていた。彼が聖者になるのを助けたのは，彼がもっとも卑しい人間達と共通にもっていた心情である。彼はやはり愛したが故に神を愛し得たのである」と，パスカルが人を愛したことを強調し，「パンセ」によって神を愛したのではなく，又「火の夜」についてもその神秘性を信じられないと云っている。

Nous tenons ici la preuve la plus forte que Pascal a aimé, que Pascal a été aimé et que, comme son cher St. Augustin, il aimait aimer et être aimé.[29]

この様にモーリャックは，「人間の本性にある愛」を信じ，それによってこそ「神を愛する」に至ることを確認して，人間の愛を，即ち，人を愛することを讃美しているが，人間性の愛そのものを絶対的 Bonheur として肯定しているのではないことは云うまでもない。神の絶対の愛を認識し得るという限りにおいて神聖なのである。「《彼女が多く愛したが故に神は彼女を愛するだろう》これはキリストが passion du coeur に身を投ずる者に対して特別なやさしさを与えるということではなく逆に愛の力によって抗し難い流れをさかのぼる者に対するやさしさなのである。」[30]

以上の様に，彼の回心は，十字架において人間としてのイエスを見て，そのイエスが示し得た人間の愛を認識したことによって，彼が，自己の内に本性的なものとしてもっていた愛は，イエスの愛と同じく，人間の根源的神聖さを示すものであることを確認したために可能となったのである。従ってモーリャックの回心は人間が根源的に聖であるという人間性に対する信仰への回心でもあるといえる。

Nous sommes faits pour aimer.[31]

この様に，モーリヤックの回心をたどって我々は，人間が根源的に聖であり得ることの

確信に，即ち「人間性」への信頼にたどりついた，といえる。

3

さて，以上の様に，モーリャックは人生のはじめに当って，人間の悲劇的条件の認識をめざめさせられ，そこから，人間の死に至る罪の意識を深くし，十字架において人間の罪をのみ凝視し，そのことから，人間の本性を憎み告発する神の厳しさだけを認識し，十字架においてその愛を示す人間としてのイエスを見ることができなかったために，神の愛と人間の愛が同一であることを認識できず，徒らに，神の愛と人間の愛を断絶させ，神の愛を実感することができないで，神を認識するだけの状態にとゞまったが，遂に十字架における人間イエスの認識に達し，人間の本性にある愛を確認し，そのことから，この人間の愛を通して理解できるべく神は，生命を犠牲にするという人間の愛の至上の姿をもって，神の愛を表わしていることを感じとり，その神の愛に入ることができるに至ったことが分る。

即ち，モーリャックは，イエスがキリストであると同時に，人間であることによって，人間の本性は，罪があると同時に，愛も又，有していることを確認し，「神の愛」と「人間の愛」の同一なることを認識し，回心することができたのである。彼の回心は，イエスにおける人間の魂の偉大さの発見であり，人間の尊厳の確認であった。

以上から我々は，人間において罪だけを認識することや，又，人間の悲惨な状況の認識は，それだけでは，苦悩の中に人間をとじこめ，絶望や虚無に人間をひき入れる危険があることを理解する。イエス・キリストが人間であったことを思い起し，人間の魂の偉大さを，即ち，人間の尊厳を意識することが救いにつながることを，モーリャックの回心を通して，理解できる。人間の魂の偉大なることは，人間がすべて子供時代において，純粋な魂をもっていたことでも証明できるとモーリャックは，子供時代の魂に注目するに至る。この子供の魂とは innocence ではなく lucidité である。

> L'esprit d'enfance est lucide, ce qu'il ne faut pas confondre avec l'innocence. [32]

この明晰なる魂において，人は愛することができ，従って愛なる神を認識できる。

ここにおいて，モーリャックの性格が決定されるに至る。即ち，徒らに悪や虚無の意識をめざめさせて恐怖と苦悩をひき起す危険を排し，それよりも子供時代の魂を思い起させることによって，人間の尊厳をとり戻させることを，自己の使命とするに至る。ジャンセニスムを徹底的に攻撃し，又，人間性の根底に悪があることをあばき人間性に不信を投げつけてきたフランス・モラリスト達の危険をも指摘する。彼にとっては

「人間性への信仰を失うことは，神の信仰を失うのと同じほどそこに危険がある。」[33]

のである。

: de Montaigne à Pascal, à La Rochefoucauld, à La Bruyère et à Chamfort, pas un seul de nos maîtres qui n'ait décelé dans nos actions les plus nobles, une racine d'intérêt, de vanité, une recherche de plaisir. Il faut considérer cette vérité en face, mais sans en devenir plus amer; l'important pour nous, n'est pas de nous croire dignes; l'important est d'être aimés, si misérables que nous soyons.[34]

この回心を経たモーリャックは，クリスチャンと同時に作家である自分の相反する使命の矛盾も解決する。人間の中にある愛の源泉を浄めること，即ち，人間の中に人間の魂の偉大さをみつけることが，即，人間を神に導いていく道であることを納得する。この様に，人間に，その尊厳をとり戻そうとする彼の立場は，同じく人間の尊厳を訴えるガブリエル・マルセルの立場を思い起させる。彼も又，苦悩にもとずく実存哲学の行きづまりを指摘し，

A mon sens, et je ne le dis pas sans hésitation, les philosophies de l'existence fondées sur l'angoisse ont fait leur temps, et il est fort à craindre qu'elles mènent à une impasse.[35]

とのべ，彼自身は人間の中に，愛や希望を省察しようとしている。

又，モーリャックが，モーツァルト，ランボー等音楽家や詩人に哲学者よりもはるかに高い地位を与えているのは，彼らが，人間の魂に，失われたエデンの園の純粋さをよび戻し，その魂の偉大さを証明して，人間の尊厳をとり戻させて，直接，人間を，救いへ導くからである。

Toute la dignité de l'homme n'est pas dans la pensée, mais dans le chant.[36]

さて，以上の様に我々は，モーリャックの回心の過程をたどることによって，彼のはじめの頃の，絶望に満ちた暗い世界と，まるで違った，人間の尊厳を信じる確たる世界に至った。

彼に関してなされている批評や評価は，特に前半期の作品に集中されている様であるが，しかし，以上みてきたところから，前半と同時に後半の作品を考えることなしには，彼の真価は理解できないと思われる。云いかえれば，彼の回心に注目しなければ，彼の正しい理解も，評価も不可能である。彼は神をも人をも確として信じていない暗黒と砂漠の世界から，神を信じ人間の尊厳を信じる確実な世界にいる。そして，その秘密，その過程を知ることこそ，Bonheur を志向する我々にとって最大の関心事であり，回心についてのこの考察の目的もそこにあった。今や，その目的が少しは達せられたと思う。

即ち，彼の回心の秘密を追ってみて，彼が，人間を，人間の本性にある愛を信じ続けていたことが分った。そして，それを人間イエスにおいて確認したことによって神を愛することができるに至ったことが分った。そして，ここに，モーリャックは，人間の原罪と，神の愛を信じてやまない厳然たるカソリック作家であると同時に，彼が，人間の本性にお

いて，人間の罪だけでなく愛をも信じている故に，彼は単に信仰の有無を問題とするカソリック作家たる位置にのみとゞまらず，人間性を信じるヒューマニズムの立場に立つ人の心をも広く魅きつけてやまない人間性作家でもあることの理由が分ったのである。

テキスト

F. Mauriac, Oeuvres Complètes, Fayard.
F. Mauriac, Maltaverne, Flammarion.
F. Mauriac, Un adolescent d'autrefois, Flammarion.
F. Mauriac, Ce que je crois, Grasset.
Gabriel Marcel, L'homme problématique, Aubier-Montaigne.

注

1) F. Mauriac, Oeuvres complètes, Tome Ⅷ
Blaise Pascal et sa soeur Jacqeline, p. 176
2) F. Mauriac, Ce que je crois, p. 24
3) F. Mauriac, Oeuvres complètes, Tome Ⅷ
Mes grands homes, p. 357
4) Ibid. Tome Ⅶ, VIE de Jésus, p. 39
5) Ibid. Tome Ⅶ
Souffrances et bonheur du chrétien, p. 252
6) Ibid. TomeⅧ, B. Pascal, p. 208
7) Ibid. TomeⅪ, Journal Ⅱ, p. 141
8) F. Mauriac, Un adolescent d'autrefois, p. 36
9) Ibid. p. 186
10) F. Mauriac, Oeuvres complètes, Tome Ⅷ, Pascal, p. 181
11) Ibid. Tome Ⅶ, Dieu et Mammon, p. 289
12) Ibid. TomⅦ, S. et B. du chrétien, p. 230
13) Ibid. p. 232
14) Ibid. Tome Ⅱ, Thérèse Desqueyroux, p. 255
15) Ibid. p. 284
16) Ibid. Tome Ⅵ, Trois récits, p. 200
17) Ibid. Tome Ⅶ, Vie de Jésus, p. 9

18) Ibid. Tome Ⅶ, Dieu et Mammon, p. 328
19) Ibid. Tome Ⅶ, Vie de Jésus, p. 86
20) Ibid. Tome Ⅶ Vie de Jésus, p. 5
21) Ibid. S. et B du chrétien, p. 232
22) F. Mauriac, Ce que de je crois, p. 58
23) F. Mauriac, Oeuvres Complètes, Journal Ⅱ, p. 137
24) Ibid. p. 141
25) Ibid. Tome Ⅶ, Vie de Jésus, p. 9
26) Ibid. Tome Ⅲ, Ce qui étais perdu, p. 87
27) Ibid. F. Mauriac, Maltaverne, p. 47
28) F. Mauriac, Oeuvres Complètes, Tome Ⅲ
Ce qui était perdu, p. 91
29) Ibid. Tome Ⅲ, Pascal, p. 252
30) Ibid. Tome Ⅺ, Journal Ⅱ, p. 119
31) Ibid. Tome Ⅲ, Ce qui était perdu, p. 87
32) Ibid. Tome Ⅺ, Journal Ⅱ, p. 138
33) Ibid. Tome Ⅶ, S. et B du chrétien, p. 269
34) Ibid. Tome Ⅺ, Journal Ⅰ, p. 35
35) Gabriel Marcel L'homme problématique, p. 186
36) F. Mauriac, Oeuvres Complètes, Tome Ⅺ, Journal Ⅱ, p. 176